

対話的観測とフィードバック理論

人称代名詞の用法が、個人社会の西欧と人間相互依存関係の強い日本では非常に違うので、従来の二人称的観測を発展的に拡張して 対話的観測(interactive observation) と命名した。

互いに対話をしようという雰囲気、すなわち「対話の場」が形成されて対話が始まる事は、私と他者の間にあるシステムが形成されているとみなせる。さらに、私が他者に話かけ、次に他者が私に応答するという事は情報の跳ね返り、フィードバックループが形成されているので、対話的観測にフィードバック理論が応用できないか研究した。

フィードバックの入力端子と出力端子が独存し、途中増幅され、その一部が入力端子直前に帰還されるのを線形フィードバック、入力部と出力部が共存系を形成し、受信した情報を出力部で一部を入力部に帰還するものを非線形フィードバックと2つに分類して研究した。

双方からの情報は数学的に連立微分方程式で記述される事を論証し、自動車の制御における情報の流れ(非線形フィードバック制御)を対話的観測の立場から具体的に研究し、自動車(入力部)が他者に、運転者(出力部)が観測者に対応させる事が可能であり、対話的観測が成立する事が明らかにされた。

対話的観測は縁起的認識に基づいているので、フィードバック理論と縁起的認識論との関連を研究していく問題が今後残されている。